



「笑顔でボランティア」

おい かわ か よ こ
及川 香代子

1936年(昭和11年)
江戸川区平井生まれ、
平井在住。



50歳のニューフェイス

「私は、歳をとっておりますが、ニューフェイスです」って、挨拶したのを覚えています。ちょうど50歳でしたよ。昭和61年、区の広報紙で「子どもたちに夢を、あなたも会員になりませんか」と募集していて、その文面に魅せられて応募したのが「江戸川ボランティアおはなしこぼこ(略称『こぼこ』)」。昭和59年にできた人形劇を見せるボランティアグループなんですよ。

その時入ったのが10人で、今も残っているのは私だけ。何度か「辞めよう」と思ったこともあったけれど、2年目に人形劇を演じる楽しさがわかったの。「桃太郎、はよう元気で大きくなれよ」と言う時、「あなたたちのお母さんも、あなたたちが生まれた時、そういうふう祈ったのよ」という気持ちになったの。終わった後、仲間からすごく良かったねと褒められたわ。子どもに伝えるメッセージに出会ったり、子どもたちから感動をもらったりするから辞められない。

江戸川区の小学校や幼稚園へ行くとお礼の手紙をもらうことがあるの。ある小学校の2年生が、人形劇の前座でやった私の話に手紙をくれたんです。「ぼくは、『おぼえていろよ大きな木』がいちばんたのしいとおもいました。また、『おぼえていろよ大きな木』をやってください」って、これしか書いてないんです。これは、もう絶対お墓まで持って行こうと思ったわ。また、私の作った動物が舞台に出て、「かわいい〜」って言われるのもうれしいですね。

失敗はしょっちゅうありますが、最初の失敗だけは忘れませんね。人形劇で「大きなかぶ」のおばあさん役の時、



◆お話会で子供たちに「裸の王様」の話をする及川さん

出番なのに絶対に違うと思って、皆が合図してくれたんだけれど頑として出なかったのよ。あとね、公演のある日なのに、私は違うと思い込んでいて家にいた時、「今どこにいるの、今日は保育園で人形劇でしょう」って電話がきて、「エーッ、今から行く」って駆けつけてなんとか間に合ったのよ。「こぼこ」は失敗しても余りにしないグループ。人も入れ替わりましたが、それぞれ才能があって、「こぼこ」の仲間に会えて良かったなと思いますね。

中国から平井に

「私は、生まれも育ちも江戸川区平井」と言いたいところだけれど、2歳から8年間は、中国の済南(チーナ)にいました。大きな中華料理店を経営していた伯父に呼ばれて、父母と姉と私の家族4人で行ったんです。父は、そこで支配人のような仕事をしていました。家は、日本人の住んでいる所と離れていたの、済南第三小学校(日本人学校)に入るまで、周りは中国人ばかりで、友だちは少し年上の中国人の女の子と犬だけ。だから、小学校に入ってから集団生活になじめなくて、学校に行くのが嫌でしたね。

4年生で終戦。玉音放送は、校庭に並んで聴いたけれどなんだかわからなくて、教室に入ったら上級生が泣いていて、日本が戦争に負けたとわかったの。姉はひと足先に帰ったけれど、父母と私は、昭和21年2月27日に伯父たちと一緒に引揚げたの。荷物はリュックひとつ、後は何も持って来られなかったわ。陸路は、屋根の無い汽車に詰め込まれて移動。戦争で線路がズタズタになって、汽車で行けない所はトラックや歩き。普通半日で行ける所が1ヶ月ぐらいかかったの。

途中、ところどころで、お金を出さないと通してくれなくて。夜は、襲われると怖いから移動しないで、ガラーッとした大きな所に入って、真っ暗な中で息をひそめていたの。だから、電気をズーッと見なかったのよ。船に乗る青島(チンタオ)という所に着いて、「わあー、電気だ」と言ったのを覚えていますね。

青島を船で出て佐世保に着いたのは、4月2日。夜明け前に「島が見えたぞー」って言う声が聞こえて甲板に

上がったら、薄闇の中に満開の桜でピンクに染まった島が見えてね。佐世保に着いて、父母が手続きをしている間、青年が私たち子どもに草笛を作ってくれたの。つるって抜くと鳴る草を「ピーピー」と鳴らして遊んでくれて、「優しい人だな」と思ったわ。

平井に戻ったら焼け野原。住む家がなくて、私は1人で千葉県八日市場の父の実家にお世話になったの。父母と離れていたの、我慢しなければならないことが色々あって苦しかったですね。その年の大晦日に、父が迎えに来てくれて、3学期から平井小学校に入りました。小学校では、荒川の土手で、勉強したこともあったわ。草の上に座って授業する青空教室よ。あのころはほとんどの子が下駄だったし、運動会は裸足で走ったわ。給食は、1つの鮭缶を男の子と半分ずつ。終戦直後で何も無かったんですね。

中学校は、区立小松川第二中学校。建物がなくて都立小松川高等学校に間借りしていたの。3年生の時に校舎ができて、私たちが机と椅子を小松川高校から運んだんですね。

■ 気持ちに通じて

高校は、麴町の大妻高等学校。昭和30年に就職した新橋の会社から、東京タワーがだんだんできてくるのが見えたわ。初任給は、6300円。お給料は家に入れてお金が無かったから、服は姉が作ってくれたり、自分でワンピースを作ったりしたの。姉が作ってくれた赤いコートを着て、赤いハンドバック持って、バス停に横っ飛びに駆けて行くと、近所の布団屋さんが「あの子が行くよ」って、元気いっぱいのお金持ち時代だったわ。

25歳で結婚して寿退社。結婚したら会社を辞めるのが普通だったのよね。姉は結婚して家にいなかったから、平井で私の父母と一緒に4人で住んだの。子どもは2人。最初は女の子、生まれたのは昭和36年11月。昭和40年10月に男の子が生まれました。

下の子が小学校に入学した時からPTA活動を始めたの。入学の時「ランドセルは重すぎるので3年生から」って言われたんですけど、3年生になってもランドセルを背負わない子がいたんですね。私は学年代表をやっていたから、皆からお金を集めて買ってあげようかと考えたんですよ。だけれど、本人も傷つくだらうし反対の人もいるだろうと思って、卒業した子のランドセルを譲ってもらってきれいに磨いて、その家へ届けたんです。後日、担任の先生が「ランドセル背負って来ましたよ」って教えてくれて、相手の方にわかってもらえてうれしかったですね。

下の子が中学生の時から区立保育園で6年ぐらいアルバイトをしたの。朝朝夕方の1日2時間だけれど、夫は単身赴任で留守だったし、子どもたちも手がかからなくなってきて、少しでも家計の足しになるのね。同居の私の両親はまだ元気で、留守中の心配が無く助かりましたね。

朝は掃除で、夕方は子どもと遊んだりするの。一番の思い出はね、「三びきのやぎのがらがらどん」という絵本を私の所へ持って来て、「よんで」って言うのよ。読んであげるとじっと聞いて、笑ってね、かわいかった。私も楽しかったわ。「子どもたちに夢を」の文章に魅せられて「こぼこ」に入ったのはこんなことがあったからかな。

■ ボランティアの原点

「こぼこ」に入ってから26年経ちました。あの頃のボランティアは、障害がある方への活動が主でしたから「こぼこ」の活動は異色でしたね。ボランティアをやっている人は、お勤めの人とか学生が多くて、私のような主婦は「ゆとりがあるのね」と言われた時代でした。でもボランティアに対する考え方も阪神大震災を境に変わりましたね。活動の幅も広がったし、NPOのようにボランティアの専門家の人もいますよ。

私の活動も広がりましたよ。昔父がバケツいっぱいのお金を取ってくれた思い出の荒川が好きで、60歳からは自然保護のボランティアに参加しているんですよ。「中土手に自然を戻す市民の会」は、中土手に池を掘って自然に戻そうとする市民プロジェクト。「荒川クリーンエイド」は、ヒヌマイトンプを戻すためのゴミ拾い活動。

「下平井水辺の楽校」は、親子で参加する川遊びのサポーター。砂ぼこりが立って草も生えていなかった場所が、14年経って今は緑がいっぱいになったのよ。春になると白つめ草が咲いて、そこでランチをするのが好きなの。

70歳から「文化財・郷土資料室ボランティア」を始めて、一之江名主屋敷の畑仕事と見学に来る子どもたちの見守り隊に月に2回、囲炉裏を囲んで聞いてもらう昔話を年に2回やっています。

「こぼこ」は、昨年(平成22年)人形劇を保育園や図書館などで40回ほどやりました。1回の公演に約3時間。その他、お話会やら定例会と、「こぼこ」に1年間で約300時間過ごしましたね。嫌なものなら続かないけれど、

周りの人が優しいし、人形劇を見に来てくれる子どもたちの笑顔がまた見たくてやってこられたのね。ボランティアって、こういう感動があるからやっていけるのかな。

流れるままに生きてきたけれど、やりたいことをやってきたと思いますよ。「趣味は何」って聞かれたら、「ボランティア」って答えるわ。やっぱり、あの草笛に戻るかなあ。引揚げてきた時に草笛を吹いてくれたあの青年の優しさは、やっぱりボランティアだと思って思うの。私がボランティアに係わり合うようになった原点かもしれないわね。

